

隠れみの^{かく}

熊本県

むかし、ずっとむかし

八代に、彦市^{やっしろ ひこいち}というお酒^{さけ}の好きな男^{おとこ}がいました。彦市は、それはそれは人をだますのがじょうずでした。

あるとき、彦市は、天狗^{てんぐ}をだまして隠れみのをとってやろうと考えました。そして、竹づつを手^てに持って、山に行きました。すると、

「彦市、彦市」と、天狗のよぶ声が聞こえました。あたりを見まわしましたが、天狗のすがたは見えません。彦市は、

「天狗のやつ、隠れみのを着てるんだな」と思いました。そこで、聞こえないふりをして、竹づつをのぞいて、

「東京は大震災だ。大阪は大火事だ。たいへんだ。あつ、人がたおれた」とさげびました。

天狗は、彦市が見ているものを見たくなくて、

「おい、見せろ」といいましたが、彦市は、

「いいや、見せない。これは望遠鏡^{ぼうえんきょう}という物で、おまえになんか見せられない」といつて、また、竹づつをのぞいて、

「ああ、東京は大震災だ。大阪は大火事だ。たいへんだ」とさげびました。天狗はますます見たくなくて、

「その望遠鏡を、わしの隠れみのととりかえないか」といいました。彦市は、

「しかたないなあ。そんなにいうんなら、少しだけだぞ。すぐに返しておくれよ」といつて、竹づつをわたすと、隠れみのを受けとつて、すぐに着ました。

天狗は、竹づつをのぞきましたが、何も見えません。どれほどひねくりかえしても見えないので、

「どうやって見たらいいんだ」といつて、ふり返りました。けれども、そのときにはもう、彦市がどこにいるのか分かりませんでした。

それからは、彦市は、夜になると、隠れみのを着て近所^{きんじよ}の酒屋^{さかや}に通うようになりました。毎晩^{まいばん}毎晩、酒屋に行つては、たるに口をつけて、好きなだけ飲^のんでよろこんでいました。酒屋では、たるの酒が毎日どんどんへるもので、いったいどうしたことだろうと

思っていました。

あるとき、彦市がよそへ出かけていたときの事です。女房にようぼうが、かまどで燃もやす薪まきがなかったので、かわりに隠れみのを燃やしてしまいました。晩になって、彦市が帰って来ると、隠れみがありません。女房が、

「薪がなかったんで、燃やしてしまったよ」というと、彦市は、かんかんはらに腹をたてました。でも、いまさうしようもありません。焼け残りのこの灰はいをかき集めて、自分の体に塗ぬりつけました。すると、やっぱり、すがたが見えなくなりました。彦市は、よろこんで酒屋に行きました。

いつものように、たるに口をつけて飲んでいるうちに、口がお酒でぬれて、灰がとれてしまいました。すると、口だけが見えました。酒屋の小僧こぞうがそれを見て、びっくりして、

「この酒だるに、口がくつついてる」とさげびました。酒屋の人たちは、何事なにごとかと思つて急いそいで集まってきました。見ると、ほんとうに、たるの栓せんのところに口がくつついています。みんなは、

「これはたぬきがばかしているにちがいない」といって、木刀ぼくとうで、さんざんにたたきました。灰が飛び散ちつて、彦市のすがたがあらわれました。みんなは、彦市をしばらくあげてしまいましたとき。

村上郁再話

資料『昔話研究3号』『球磨民話抄』丸山學／三元社